

～旧約聖書を読んで感じること～ (42) 士師記(9) 謎めいた男ミカとダン族の移住

エフライムの山地にミカという男が母と暮らしていました。ミカは自分の家に神殿を持ち、エフオド(祭司の胴着)と、テラフィム(守り神)や、銀の彫像を持ち、息子を祭司にして礼拝をしていました。



ミカと偶像礼拝 Jean Bondol 1372

この経緯は次のようです。ミカの母は銀 1100 シェケルもの大金を持っていたのですが、それを盗まれ、泥棒を呪ったほど悔しがりました。実は、犯人は息子のミカだったのです。ミカは呪われて恐怖を覚えて、母に罪を告白しました。すると母は息子を赦し、息子への呪いを解きたいと願ったのか、「わたしの息子に主の祝福がありますように。息子のために彫像と鑄像を造っていただくとして、この銀はこの手で聖別し、主におささげしたものです。今これをあなたに返します。」(± 17:2-3) と言って、そのお金のうちから 200 シェケルを取り、銀細工師に頼んで、像を造らせ、それを祀りました。こんな大金を持っている母とは誰でしょう？ デリラではないでしょうか。

ミカの家一人のレビ人の若者が適当な寄留地を求めて、旅の途中に立ち寄りしました。ミカは若者に、「わたしの家に住んで、父となり、祭司となってください。あなたには年に銀十シェケル、衣服一そろい、および食糧を差し上げます」(± 17:10)と頼むと、レビ人は進み出、ミカの家を祭司となりました。

「レビ人がわたしの祭司になったのだから、今や主がわたしを幸せにしてくださることが分かった」(± 17:13)と言って、ミカは喜びました。ミカの大金持ちの生活ぶりも分かります。レビ人はアロン家の祭司に仕える者たちであり、嗣業の土地を与えられない部族でしたから、これも安泰な生き方と思ったのでしょうか。

ちょうどこの頃、サムソン亡き後、ダン族は居場所を失い、嗣業の地を探し求めて、勇士 5 人を斥候として送り出しました。彼らは旅の途中で、ミカの家で一夜を過ごしました。その時レビ人の声を聞きつけ、祭司の仕事をしていることが分ると、旅の運勢を尋ねました。若者は「安心して行かれるがよい。主は、あなたたちのたどる旅路を見守っておられる」(± 18:6)と告げました。彼らは喜び、更に進んでライシュに着き、その地の民が、シドン人のように静かに、また、穏やかに安らかな日々を送っているのを見た。その地には人をさげすんで権力を握る者は全くなく、シドン人からも遠く離れ、またどの人間とも交渉がなかった(士師 18:7)ので、その土地を奪うことにしました。



ダン族の移住

彼らは戻り、武器を身に帯びた 600 人を伴って再度ライシュを目指しました。その途中、彼らはミカの家立ち寄り、銀の彫像、エフオド、テラフィムを奪いました。ついでに若者に、「口に手を当てて、一緒に来てください。わたしたちの父となり、祭司となってください。一個人の家の祭司であるより、イスラエルの一部族、氏族の祭司である方がよいではありませんか」(士師 18:19)と言って誘うと、その若者は快く引き受けてダン族と一緒に出発しました。親切を裏切られ、ミカは怒って追いかけてみましたが、ダン族が強そうに見えて引き返しました。

ダン族はライシュを襲い、占領し、そこに定住し始めました。自分たちが拝むために、例のレビ人の祭司を擁し、盗んできた彫像を立てました。この祭司について、モーセの孫でゲルシヨムの子であるヨナタンとその子孫が、その地の民が捕囚とされる日までダンの部族の祭司を勤めた(± 18:30)と記されています。

同胞同士の裏切り、強奪はおろか、偶像を持って礼拝するようになりました。

士師記は「そのころ、イスラエルには王がいなかった」と「それぞれが自分の目に正しいとすることを行った」と 2 点を強調し、指導者を求める気運と共に、モーセの戒めを忘れた民の姿を記しています。